

ニューヨーク摩天楼ペ
ントハウスで契約破棄
を告げた夜にウォール
街の若手CEOから夜
景の前でエレベーター
も止められて貪られる
カントボーイ通訳

膝裏が、もう痺れていた。

「ふ……っ、う」

エレベーターのステンレスに額を押し当て、玲は息を殺す。八十階までの上昇は四十二秒。それだけの時間で、後孔の奥に潜む花卉が、じわりと熱を孕んだ。

(嘘でしょ……まだ顔も、見ていないのに)

握り潰した封筒の縁が、汗ばんだ指の腹に食い込む。中身は契約終了通知書と、週払いの最終インボイス。三ヶ月、律儀に振り込まれた「日本人恋人」役の報酬を、今夜きっぱり清算する。それだけのために、この摩天楼の頂上まで上がってきたはずだった。

なのに――

ドアが開ききった瞬間、霧雨に滲んだマンハッタンの夜景と一緒に、あの匂いが鼻を打った。

クリード・アヴェントゥス。

パイナップルの上にベルガモットが乗り、その下から汗とムスクの濡れた重さが立ち上がる。三ヶ月前、契約書にサインをした日に初めて嗅いだ匂い。毎晩ベッドの中でこの香りを思い出し、太腿を擦り合わせて、それでも条文に縫って秘密を守り抜いた。

その元凶が、五メートル先のバルコニーに立っていた。

「Welcome home, baby.」

絹のシャツの第二ボタンまで外し、ドンペリ P2 のフルートを傾ける男。イーサン・コール。三十四歳、コール・キャピタル CEO。百九十センチの体躯にトム・フォードのスリーピース——上着もネクタイも、すでに解かれている。ブロンドの髪先がペントハウスの間接照明を弾いた。灰青の瞳が、ガラスの反射越しに玲を捉える。

「契約は今日で終わりです」

玲は革のソファに腰を下ろさず、立ったまま封筒を差し出した。シャンデリアの光がオーク材の床に落ちる。グランドピアノの黒い天板に、夜景がそのまま映り込んでいた。

「M&Aは無事にクロージング。日系企業の三好専務、ご満足いただいています。日本人の恋人役は、もう必要ない。違約金は規定通り——」

「座れよ、玲」

日本語だった。

三ヶ月、契約条文に書いた通り「Rei」とだけ呼ばせた男が、今夜は唇で名前を転がすように、玲、と呼んだ。

「っ……」

膝の裏が痺れる。

あの匂いが、近づく。革靴のかかとがオーク材を鳴らした、一歩ずつ。

「立ち話で済む話じゃないだろ。三ヶ月だぞ。お疲れさん、
くらい言わせろよ」

「結構です」

玲は封筒を絹のシャツの胸に押し付けた。指先がイーサンの胸板に触れた途端、布越しに伝わったのは肌の温度ではない。男の熱だった。三ヶ月、額にしか触れさせなかった唇が、勝手にひとつ唾を呑む。

「では、私はこれで」

踵を返してエレベーターのボタンを押した。

反応がない。

「……あの」

「My elevator. My building. My rules.」

イーサンはスマホを取り出しもしなかった。指紋認証の権限が、たった今切られたのだと察するまで、三秒。

「契約違反です。引き留める権利は、あなたにはない」

「契約ね」

イーサンがグラスをピアノの天板に置いた。氷の鳴る音。シャンパンの泡が黒い鏡面の上で弾ける。

「じゃあ最後にひとつだけ確認させてくれ、玲。——お前の演技、どこからが本物だった？」

「……は？」

「三ヶ月、お前のキス、全部Foreheadにしか許さなかったよな。契約条文5条3項。なんでだ」

「規定通りです」

「じゃあ訊き方を変える」

革靴の音が止まった。玲の背中はピアノの脚の彫刻に触れる。逃げ場がない。霧雨が窓を打ち始め、マンハッタンの星がガラスの上で滲んで揺れた。

「俺がオフィスから帰ってシャツを脱ぐと、なんでお前の瞳孔が開く？」

「……っ」

息が止まった。

見られていた。三ヶ月、全部。

「答えろ」

イーサンの長い指が、玲のシャツの第一ボタンに触れる。触れただけ。外そうとはしない。それなのに、ボタンの真下の鎖骨が、ぞわりと粟立った。

「……契約条文4条2項。身体的接触の禁止。違反です」

「契約は今日で終わりだろ。お前が破棄を持ってきた」

「終了は明日の正午からです。今は——」

「Three more hours. 三時間ある」

第一ボタンが、ぷつ、と外れた。

外す指は速くない。むしろ、ゆっくり過ぎる。下から二つ目までボタンが外されると、玲の薄い胸板に、男の指の影が落ちた。

「Don't.」

「日本語で言えよ。お前、英語のときは演技モードだろ」

「……やめて、ください」

「ほら。Rei、お前は本気のとき、敬語が崩れる」

「っ」

崩れたのは敬語ではない。理性のほうだった。

イーサンが玲の腰の両側に手をついた。ピアノの天板を挟んで、檻のように。鼻先が玲のうなじへ近づく。触れない。だが、息が肌を撫でた。

「You smell different tonight.」

「あ……っ」

「今夜のお前、匂いが、違う」

うなじにぞくりと鳥肌が走った瞬間、後孔の奥で、なにかが、ほどけた。

三ヶ月、毎晩ベッドで抑え込んできた疼き。男の匂いを嗅ぐたび花卉が潤み、それでも条文に縫って、自分の指でも触らなかった場所。

その場所が、今、トラウザーズの内側で、じわり、と濡れる。

「……っ、はっ、あ……」

「Heh.」

イーサンが鼻を鳴らした。

「——This smell.」

声が、わずかに、掠れた。

「三ヶ月、俺を狂わせてた匂い。お前、これだったのか」

「ち、違……」

「カントボーイ。それも、契約恋人を絶倫CEOにあてがう類の、超レアもの。日本の登録名簿、引っ張ろうか?」

「やめ、てくださ……っ」

イーサンの指が、ようやくシャツの裾を引き出した。

ベルトのバックルに、男の指がかかる。革のソファ越しの夜景が、玲の視界の隅でぐにやりと滲んだ。

契約条文5条3項。

唇への接触は、Foreheadのみ。

その額に、三ヶ月分の本気が、降ってきた。

「……っ、ふっ」

最初は、いつものキスと同じ角度だった。撮影用、カメラの前で繰り返した「日本人恋人」のデモンストレーション。額の少し下、こめかみのあたりに、ちゅ、と乾いた音を落とす——はずだった。

唇に来た。

「ん……っ、う、っ」

舌が、入る。

奥歯の裏側、上顎の溝、舌の付け根。三ヶ月、絶対に許さなかった場所を、ひと舐めずつ、確認するように犯される。玲の手が反射でイーサンの胸を押し返した——のに、絹のシャツを握り込むだけで、力が、入らない。

「ふ、あ……っ、ん」

「Liar.」

唇が離れ、至近距離で囁かれる。

「三ヶ月、お前ずっと俺に欲情してただろ」

「……っ」

否定の言葉が、出なかった。出せなかった。

後孔の奥、花卉から透明な蜜が、トラウザーズの内側へ染みる。布が、太腿の内側で、じんわり貼り付いた。匂いが、立つ。三ヶ月、自分のものとは思えなかったあの濡れた匂いが、今、摩天楼ペントハウスの真ん中で、男の鼻先に届いていた。

「Beautiful.」

「やっ、嗅が、ない、で……っ」

「お前、ピアノで弾いたことあるか? ベヒシュタイン」

「な、なんで急に——」

「いま、お前の汗で、Cの黒鍵に染みが出来てる。お前の演奏、聴かせろよ」

言いざま、イーサンが玲の身体をピアノの天板に押し倒した。

ヴンッ、と低く、グランドピアノの弦が共鳴して鳴いた。

黒い鏡面に、玲の首筋から鎖骨までの線が映る。シャツがはだけ、白磁の肌に夜景の光が散った。摩天楼の窓灯りが、星みたいに、玲の身体の上で瞬く。

「やっ、ここ、ピアノ……あ、汚れ、ます……っ」

「いいんだよ、お前で汚れるなら」

「っ、あ……あああ……っ♡」

トラウザーズが膝まで下ろされた。下着の中、後孔の花弁が完全に開ききって、内腿の上半分まで蜜が伝う。イーサンが二本指を、その濡れた花弁に滑り込ませた。

「Three months.」

指が、一節分、入る。

三ヶ月、自分でも触れなかった場所が、男の指の太さを、初めて、覚えた。

「Every single night, I imagined this.」

「ひっ、あ、あああ……っ♡♡」

「毎晩、ここに入ることを、想像してた」

「やあっ、そ、そんな、嘘……っ」

「嘘じゃない。俺のオフィスの机の引き出し、開けてみろよ。お前と撮ったパーティーの写真、Forehead キスのやつ、全部、皺になってる。何回握り潰したと思ってる」

「あ……っ、っ」

花卉の縁が、男の指で円を描かれる。

くちゅ、と、自分のものとは思えない水音が、ピアノの黒い鏡面の上で響いた。指が、二本に増える。三ヶ月分の渴望に応えるように、奥が勝手に男の指を吸い込みにかかった。

「……っ、なに、これ、こんな、こんなのっ、おかしいっ」

(うそ、私の身体、こんなに濡れて……っ)

頭の中で、自分の声が震える。

通訳として、日本語と英語と北京語の隙間を渡り歩いてきた頭脳。感情を切り離して依頼人の言葉だけを正確に運ぶ仕事。その自分が、たった一人の男の指二本で、こんな声を出している。

「Open up. もっと開け」

「ひあっ……っ、あ」

膝裏に手をかけられ、ピアノの天板の上で両脚を M 字に開かされた。後孔の奥に潜んでいた花卉が、完全に、男の視界へ露出する。

「……Christ.」

イーサンの声が、初めて、揺れた。

「お前、こんな所、隠してたのか」

「み、ないで、くださ……っ」

「無理。これは見るしかない。三ヶ月の罰だ」

「ばつ、って……っ、あ、あ、あああっ♡♡」

「俺をこれだけ焦らした罪。今夜、全部、清算してもらう」

ベルトのバックルが鳴った。

ジッパーが、ゆっくり、降りる音。

その音だけで、玲の花弁が、ひくり、と疼いた。

「……っ、嘘、まって、まだ、まだ心の準備が——」

「契約終了は明日の正午って、お前が言ったんだろ」

「いま、いま、それを今、引き合いに——あ、あ……っ♡」

熱いものが、花弁の縁にあたった。

太い。太くて、硬くて、先端が湿っている。摩天楼八十階のグランドピアノの上で、玲のあらゆる経験値を超える質量が、今、自分の中に入ろうとしていた。

「Look at me, Rei.」

玲は、見上げた。

灰青の瞳が、夜景を背負って、玲を見下ろす。あの冷徹なウォール街のCEOの顔ではない。三ヶ月、契約相手として観察し続けた、あの計算高い視線でも、ない。

飢えていた。

「One.」

声と一緒に、ぬぷり、と、一気に、最奥まで、貫かれた。

「ひっ、あああああ……っ♡♡♡」

ピアノの弦が、ヴァンッ、と長く鳴いた。

玲の悲鳴と、低い倍音が、強化ガラスの窓に反響する。摩天楼の夜景が、涙で滲み、星の数だけ、ぼやけた。

「あっ、奥、おく、う……っ♡♡ こわれ、っ、こわれちゃう……っ」

「ここか。お前の最奥、ここか」

「やっ、つかな、いで、つかな……あ、あああっ♡♡」

「Say my name.」

腰が、引かれて、また、奥まで、突き戻される。

玲の指がピアノの天板を引っ掻く。爪が黒い鏡面を滑り、何の引っかかりも得られない。

「い、いー、さ……っ、いーさん、っ♡♡」

「Good boy.」

褒められた。

三ヶ月、契約上のパートナーとして、ビジネスの合間に「ヨクヤッタ」と日本語で褒められたことはあった。それと、これは、違う。今のは、本気の声で、本気の褒め言葉。

その違いを、玲の身体が、誰よりも早く覚えた。

花卉が、男の根本を、ぎゅう、と、締めつける。

「っ、Fuck.」

イーサンの息が、初めて、乱れた。

「お前、絞めるな……っ、いま絞めたら——」

「あぁっ、あっ、あっ♡♡だ、だっておちんぼ、おちんぼが、っ♡♡」

「言うな、Rei、それ以上言うな、もたない——」

「あ、あああ、いっ、出さ、出さない、でえ……っ♡♡」

「無理。お前が悪い」

腰を最奥に押し付けたまま、男が、玲の中で、爆ぜた。

ドブン——ッ♡♡♡

「っ、ひっ、あああああああ♡♡♡」

熱い。

熱くて、量が、信じられない。三ヶ月分、と男が言った言葉の意味が、子宮口の奥で、はじけて腑に落ちた。

ピアノの黒い脚に、白濁が伝う。

摩天楼の夜景を映した鏡面の上で、玲の蜜と男の精が、混ざった。ヴァン、と、もう一度、ピアノが鳴いた。

「……っ、はっ、はっ、はぁっ」

「動けるか?」

「うご、け……っ、ない、です……っ」

「だろうな。じゃあ、抱いて運ぶ」

玲の身体が、ふわり、と持ち上がった。

貫かれたまま、だった。男のものは、まだ、奥に、刺さったまま。歩くたび、ずちゅ、ずちゅ、と、腹の中で擦れる。

「やっ、抜け、てっ、抜いてくださ、いっ♡」

「やだね。お前のここ、まだ熱い」

ぼすん、と、革のソファに、玲が下ろされた。

キャラメル色のイタリアンレザー。三ヶ月、ここで何度もイーサンと並んで座り、契約上の写真を撮らせてきたソファ。革の匂いが、汗ばんだ背中で、ぐじゅ、と鳴いた。

「シャツ、邪魔だな」

「あっ……」

残っていたシャツのボタンが、上から下まで、全部、外された。

玲の白い胸が夜景の光に晒される。鎖骨のくぼみに、汗が溜まっていた。

「乳首、勃ってんな」

「いっ、言わない、で……っ」

「ピアノの天板に擦れて、立ったか? 感度よすぎだろ、Rei」

「ち、ちが……っ、あ、あ、あああっ♡♡」

男の指の腹が、薄桃色の突起を、軽く、潰す。

胸の先から後孔の花弁まで、一本の電流が、走った。

「ひっ……っ、そこ、つままない、で、っ♡♡」

「ふうん。じゃあ、こっちは?」

反対の乳首にも、指が来た。

左右を同時に、こりこり、と転がされる。玲の腰が、勝手にソファの上で跳ねた。男のものが、まだ、刺さったまま、だから、跳ねた拍子に、奥が、また、突き上げられる。

「あああっ……っ、あ、あっ♡♡」

「ネクタイ、外したな、俺。今夜、運がいい」

「な、なんで——っ、あっ」

男が、首から外したばかりのシルクのネクタイを、玲の両手首にかけた。

万歳の姿勢で、ソファの背の格子に、両手首が括られる。

「待っ、っ、これ、なに、待って、待っ——っ」

「契約条文6条2項。Restraint禁止」

「あ……っ」

「今夜は破棄だ」

いつ抜かれたのかも、玲には分からなかった。

気づけば、男のものが、もう一度、最奥に戻ってきている。革のソファに膝裏を押し付けられ、両脚を、肩の上まで折り畳まれた。M字、なんて生易しい形ではない。完全に、夜景に向かって、開かされた。

「Look at the city.」

「やっ、やっ、いやだあ……っ♡」

「マンハッタンの頂上で犯される気分は、どうだ?」